



The Summer Solstice
The summer solstice is the time of year when the sun remains in the sky the longest.
At the foot of Mount Ena, massive stones believed to be remnants of ancient rituals are scattered throughout the landscape.
The sight of the summer solstice sun—the most powerful of the year—rising through the gaps between these massive stones is imbued with the sense of awe that ancient people must have felt toward the celestial bodies.

Memories of Kashino's Meli-za, Woven by the Light of the Summer Solstice
Ahead of the summer solstice, I visited the "Meli-za," a theater nestled in Kashino, Nakatsugawa City.
Built in 1884 by local volunteers, this theater, constructed entirely of cypress wood, has resulted a central hub of entertainment for the community.
At this time of year, as we approach the summer solstice, the richest and most powerful sunlight of the year pours in through the large skylights and sliding doors on the side of the building.
The direct rays from the high sun reach deep into the dimly lit theater, clearly highlighting the beautiful wood grain of the well-worn hinanichi (stage runway) and revolving stage.
Even the fine dust dancing within the beams of light glows golden, as if part of the stage production.

GESHI 夏至



BOSHU 芒種

Grains in Ear
Before the arrival of "Grains in Ear," Kashino in Nakatsugawa City bursts with vibrant life.
This is a season when the regional pride of "One Tree, One Can, One Vegetable"—represented by Tono cypress, Hida beef, and Kashino tonari—comes to life with vigor.

In Kashino, the thousand-year-old "Great Cedar of Kashino" stands quietly. Said to have grown from a cane planted by Minamoto no Yoritomo, this magnificent tree radiates a powerful "Yang" energy. In contrast, there is also a gentle "Yin" story dedicated to small lives: the midsummer "Slug Festival". Its origins trace back to Monk Mongaku, a sorrow-swept monk. Originally named Endo Ikko, he fell in love with his friend's wife, Kosa Gosen. When Morio drew his sword against his friend, Kosa Gosen resolutely took her husband's place, sacrificing her life in the dark. Deeply remorseful, Mongaku took vows and established a sacred site at Hokuji in Kashino. At Mongaku's tomb, slugs with a white pattern resembling a second cut began to appear. The villagers tenderly embraced them as Kosa Gosen's soul, passing down this tragic love story. "Grains in Ear" is the season for sowing seeds. The strength of a thousand-year-old tree and the compassion for fragile lives are both seeds left by predecessors, ready to sprout warm buds in our hearts. This year's Slug Festival will be held on August 21, 2026.

― 芒種 ―

「芒種」を迎える前に、中津川市加子母を訪ねました。加子母は、一気に生命の色彩を濃くします。田には早苗が揺れ、山の恵みで育つ飛騨牛、瑞々しい加子母トマト、そして天を突く東濃梨が美しいと感じます。

「木・牛・一葉」
この地が誇る「木・牛・一葉」の生業が力強く動き出す。活気に満ちた季節です。

加子母には樹齢千年を超える「加子母の大杉」が静かに佇んでいます。鎌倉幕府を開いた源頼朝が倒した杖が根付いたとされる「手植えの杉」が、枝が垂れ下がる様子は、杖を刺した当時のまゝを表しているそうです。伊豆で頼朝と親交を結んだ僧・文覚上人が霊場を開く際、頼朝が寄せた援助が大樹の始まりでした。途方もない歴史の息づかいが、力強い「陽」のエネルギーを放っています。

一方で、天を仰ぐ大杉とは対照的に、地を這う小さな命に寄せられた「陰」の優しい物語も眠っています。それが盛夏の「なめくじ祭り」です。由来は、平安時代から鎌倉時代にかけて武士であり僧侶でもあった文覚上人の伝説に遡ります。京都の武士であった通称盛徳（後の文覚上人）は、友人の妻・装束御前に恋をしました。盛徳は友人に刃を向けますが、彼女は自ら身代わりとなることを決意し、暗闇の中でその命を捧げました。罪を深く悔いて出家した文覚は全国を行脚し、加子母の地を気に入り、祈りの聖地として感徳寺を開きました。

文覚の死後、墓碑には太刀筋のような白い模様を持つなめくじが現れるようになりました。墓守が毎日供えた米の研ぎ汁が引き寄せていた日々の営みにすぎないものさえ、村人たちは装束御前の魂だと信じ、悲恋の物語として優しく包みこみます。

自然への畏敬と小さな命への優しさが交差する記憶が、いつか皆さんの「根っこ」を支える力になると信じています。芒種は種をまく季節。千年を生き抜く木の力強さも、小さく儚い命に寄せる思いも、先人が遺した未来への種です。この土地の鼓動が、心に温かな芽を吹かせることを願っています。

― 夏至 ―

一年のうちで最も太陽が空に長く留まる季節、夏至。恵那山のふもとには、古代祭祀の痕跡とされる巨石が点在しています。その大きな石と石の間から、一年で最も力強い夏至の太陽が昇る光景―そこには、太古の人々が天体に抱いたであろう畏敬の念が息づいています。この地域にとって夏至は、単なる季節の節目ではなく、大地のエネルギーと太陽の恵みが一番強く交わる特別な時なのです。

夏至の光が訪ぐ、加子母・明治座の記憶
夏至を前に、中津川市加子母に佇む芝居小屋「明治座」を訪ねました。明治27年（1894年）に地元有志によって建てられたこの総ヒノキ造りの芝居小屋は、電気による近代的な照明がなかった時代から、人々の娯楽の中心であり続けました。その熱気あふれる空間を照らし出していたのは、他でもない「自然の光」です。

夏至を迎えるこの時期、建物の側面に設けられた大きなあたり窓や引き戸からは、一年で最も豊かで力強い太陽の光がたっぷり注ぎ込めます。高く昇った太陽からの真っ直ぐな光線は、薄暗い劇場の奥深くまで届き、使い込まれた花道や回り舞台の美しい木目をくっきりと浮かび上がらせます。光の筋の中を舞う細かな埃さえも、まるで舞台演出のように黄金色に輝くのです。

現代の私たちは、スイッチ一つで夜を昼に変えることができます。しかし、太陽の軌道とともに劇場内の表情が移ろい、スマホの光では味わえない、本物の光の演出を体験できる場所です。この貴重な建物を維持し続けるため、明治座は現在も見学できるように公開しています。長い年月を経て磨かれた客席に身を置くと、この場所を大切に守り、未来へと結んでいこうとする地域の人々の強い意志が、今も確かに受け継がれているのを感じます。今年の夏至は、少しだけ足を延ばして、明治座の写真を撮ったり歴史を感じたりしてみませんか。大きな窓から射し込む長い一日の光の中に、この地が紡いできた温かな記憶に触れるはずです。

絵描き 本間 希代子

● 価値観が反転する驚き
名古屋の下町で生まれ育った私が加子母で暮らすきっかけは「森の交流大使 岐阜県森林山村文化研究員」でした。今でいう「地域おこし協力隊」に似たお仕事で、2年間岐阜県の山村に暮らしながら「村おこし」のお手伝いをするというものでした。

山も田んぼもほとんど見たことが無い生意気盛りの私は、それはそれは上から目線で見ているなら助けてあげようと思って来しました。

ところが「加子母村」は私が思っていた「村」のイメージとは程遠くとても元気な村でした。

山仕事や農家の仕事を知って、祭りや歌舞伎に参加して、初めての体験に驚くばかり。仕事場でお世話になっていたおじさんが祭では笛を吹き、自分達のことは自分達で解決し、寡黙なおじいさんがボソッと呟く言葉が深く。その多面性、生き抜く力。かっこいいなあと思いました。

● 加子母に育ててもらった
4月に加子母に引っ越してきた私は暖房器具を持っていませんでした。困っていたら仕事場でお世話になるおじさんが「任期が終わるまで使つてええよ」とコタツ一式とストーブ、中身の入った灯油タンクに手動ポンプまで持ってきてくれて、驚くやら嬉しいやら。他にも「好きなだけ持つていいぞ」と野菜をくれる方や「家はあるか？」と持ってきてくれる方もいました。

ある時「お返しすることがないので、これ以上はいただけません。」と言ったことがあります。そうしたら「そんなべんごうなこと。お前から何か返してもらおうと思ったらん。お前ができるようになったら下の奴にやつてやつたらええんや。」と。目から鱗でした。

● 受け取ったものの大きさ
加子母村が中津川市と合併してから、仲間と地域コミュニティ誌「かしも通信」を毎月発行していました。私の大好きな「加子母らしさ」

が無くならないで欲しい、こんなところが素敵ですと伝えたいと思って。かしも通信の活動の中で本も2冊作りました。聞き書き本「加子母人」です。石油に依存する以前の暮らしの知恵、加子母で暮らしてきた人達の思い。話し手の人生を聞かせてもらった経験は私にとつて宝物でもあり、何か大きなものを受け取ったような責任さえ感じました。

20年続けたかしも通信は昨年休刊しましたが、今度は地元生まれの30代の人達が新しく「月刊どさない」を立ち上げて6月で1年になります。若い世代が続いてくれて本当に嬉しく楽しみに読んでいます。

加子母で暮らして30年。家族も出来てずいぶん大人になりました。最近では育ててくれた方々を見送ることが増えました。いただいたものは大きくて全然返せていませんが、せめて暮らしの中で絵を描くことで、次の世代になにか繋げていけたらと願っています。



新美南吉文 本間希代子 絵
絵本「ひとつの火」より
加子母の音の暮らしや雰囲気、風景をたくさん盛りこみました。
少年が灯したロウソクの火が次から次へと分けられて
繋がっていくことを想像するお話です。



発行元：糸の結

私たちは恵那山のふもとでフリーペーパーを発行している任意団体です。二十四節気に沿って地域の魅力を手紙で送るような活動をしています。有難いものを楽しみと思える情緒を育み「ある」ことへの気づきを徒然と。恵那山の頂からヤッホー！と呼び、その響きを日本全国、そして世界へ届け、こだまするような活動を目指しています。

エディター：水野 孝美 / 監字：糸の 結 / 写真：水野 孝美 / 校正：佐藤 美奈美 / アートディレクション&デザイン：大石 佳典 [グラフィック] / editor: kotone misuno / calligrapher: nagaya shigeki / photo: kotone misuno / proofreading: ayumi kato / art direction & design: yoshitomi oishi [grd]

次回 大暑 7月23日

sponsor

Kaika lab.
CREATIVE OFFICE

明陶運輸株式会社



もりのいえ
MORI no IE

新崎有美
伊藤彩

伊藤実加
寺澤俊二

山屋菜緒 / 安藤優人
川上容平

安藤由美子
(株)ひかりや

いわむらやぎの里
明智中学校・多治見工業高校デザイン科 卒業生有志

小本曾美香
皮地坪子



糸の結へメッセージを送ろう！

「私だったらここを取材したい!」「この人の話を聞いてみたい!」
という地元気になる場所はありませんか?皆さんのリアルな視点やアイデアを、InstagramのDMでぜひ教えてください。感想もお待ちしております。

Instagram
Instagram.com/wenanoyui/

ホームページ
wenanoyui.com

メールアドレス
wenanoyui@gmail.com



かしも検索



糸の結
ホームページ



メール
ホームページ